

9月3日 ガラテヤの信徒への手紙 6章 11～18節

説教題：「キリスト者として生きるということ」

私たちは、かつて太平洋戦争が終戦した8月を過ごし、かつて関東大震災が起きた9月をこれから過ごしていきます。今私たちが普通の、平和な時間を過ごすことが出来ているからこそ実感しにくい、「今私たちは生きている」という実感が、決して当たり前なものではないことを考える時が与えられているのです。今日の聖書箇所著者パウロも、そのように「生きていることが当たり前ではない」ことを、いつも感じていた人物であります。パウロ自身がそもそもキリスト教の迫害者であり、彼の目の前では何人ものキリスト者が殉教していました。回心したパウロは、その分だけいつも「いつか自分も彼らと同じように死ぬだろう」という思いがよぎっていたことでしょう。

そのパウロが、「私が世にはりつけにされている」という言い方で、イエス様の十字架と私たちの関係を表しています。私たちキリスト者は、イエス様の十字架によって新たに生まれなおして、洗礼によってその恩恵に与る喜びを共に歩み出しています。永遠の命が与えられて、復活後の人生の方が長いと教えられている私たちなのですが、それでも私たちは「すぐに死んで神様の元へ行こう」とはならず、この世の中で生きているのです。それはもちろんこの世での様々な楽しいこと、嬉しいことがあるからでもあります。それだけでなく、私たちにはイエス様の十字架を少しでも多くの人に伝え、イエス様を信じる人を一人でも増やすための使命が与えられているからでもあるのです。マタイによる福音書 28章で示されている大宣教命令「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によりバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことをまもるように、彼らに教えなさい。」その言葉を現実にするためにも、私たちはこの世で生きているのです。そう考えれば、イエス様の十字架によって、私たちはこの世で生きる意味を与えられている、十字架によって私たちがこの世にはりつけにされていると言えるのです。

これらのパウロの言葉を受けて、私たちはどのように「キリスト者として生きる」ことが出来るのでしょうか。私たちはどんな時も、平和な時代であっても戦争中でも、日常の中でも被災中でも、楽しい時でも苦しい時でも、どんな時もキリスト者として生きることが求められています。それは逆に、「どんな時でも神様が共にいてくれる」ことをも意味しているのです。この世の地獄のような、私たちが「本当に神はいるのか」と感じるような出来事を目撃したその時でさえ、神様は私たちと共にいて下さる方です。その神様の御心を、「ここにキリスト者がいる」「ここに神様がいる」ことを示すことが、私たちには求められているのです。

私たちがどう生きていくのか、それは先に天に召された先達の人生から学ぶことも出来ると思います。歴史に思いを馳せて、学ぶことを大いに学び、反省することはしっかりと反省する、その私たちの一歩ずつの歩みの上に、確かに神様の御手は置かれるのです。神様に強められながら日々を生きる、その力強さを背に感じながら、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ガラテヤの信徒への手紙 6章 11～18節

- ・ 11:このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます。しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。